

伝えたい思い

平成2年3月3日。出産予定日から、その日はすでに1週間が過ぎていました。第二子目ということもあり少し早まるかと思っていた出産でしたが、なかなかその兆候ちようこうがありませんでした。上の子のお産のときは陣痛じんつうが始まってから38時間もかかりましたので、その日も朝の少しお腹が張ったような痛みを、いつものことと気にすることもなく過ごしていたのです。ところが昼食をとるところになると座っていることもままならないほどの強い痛みつらに襲われ、主人に頼んで病院に連れていってもらいました。そして病院に着くとすぐ分娩室ぶんべんしつに直行となりその後わずか2時間あまりで、私は第二子目をこの胸に抱くことができたのです。出生時の体重は3,300グラムありましたが、長男の時と比べると、すんなりと出てきてくれたという感じにんぶでした。妊婦検診の時には、お腹の子は男の子だと言われていただけに、分娩室ぶんべんしつで女の子だと知らされたときの驚きと感動を今も忘れることができません。この「ひな祭り」の日を選ぶかのように生まれてきてくれた娘に、主人は幸せになってほしいという願いを込めて、しょうこ「祥子」と名前をつけました。

祥子は女の子のせいか母乳の飲みが悪く、1か月検診のときに発育不良の診断を受けて大変心配しました。しかし2歳を過ぎるころになると公園のジャングルジムのてっぺんまで、あっという間に登ってしまうような元気な女の子になったのです。祥子は玩具等おもちゃはあまりほしげきれいならず、綺麗な紙やモールを集めるのが好きで、それを使ってプレスレットやペンダントなどを作っては、私のエプロンに「プレゼントだよ！」と、セロハンテープで貼りつけてくれました。小学校に入学する年のお正月には、買ってもらったばかりのランドセルを私に注意うれされながらも、嬉しそうに背負いながら遊んでいました。そして6歳の誕生日が来ても体はまだ小柄でしたが、下に生まれた弟の面倒をよく見てくれるやさしい姉に成長してくれたのです。小学校に通い始めてからは、その帰り道に道端に咲いているタンポポやシロツメクサひめおどりこそう、姫踊子草等の野の花を花束にして毎日のように届けてくれて、それを私が飾るのうれを嬉しそうに見ていました。時々しおれたシロツメクサが届くことがあり不思議に思ったことがあります。祥子は昼休みになるとグラウンドの隅に咲いているシロツメクサを摘んでは先生の机の上に「プレゼントだよ。」と置き、残りの半分を「これはお母さんにプレゼントするの。」と大事そうにハンカチに包んでいたという話を学校の担任の先生から教えて頂きました。しかしこのシロツメクサの訳を私が知ったのは事故で祥子が亡くなってしまってからで、未だにそのお礼を私は祥子に伝えられずにいるのです。

その日、平成8年7月18日はまだ梅雨が明けておらず、朝は少し肌寒いくらいでした。祥子は次の日に生まれて初めてもらう通知箋つうちせんをととても楽しみにしていました。そしてその年の夏休みには、かねてから約束していた東京ディズニーランドへの旅行や、湯の浜への海水浴など、楽しい予定が目白押しに詰まっていたのです。朝、交通量の多い道路を渡り終える所まで下の弟の手を引き、子供たちを送って行くのが私の日課でした。祥子は食が細いせいもありなんとか少しでも食べてほしいと、その日、「頑張っみがて食べたら、良いものをあげるね。」と、弟の弘基ひろきと競争させるようにして食事をさせました。そして私が用意していたのはゼリーだったのですが、その時に限ってめったにだだをこねたことのない祥子が「ゼリーじゃなくて、アイスがいい。」と言したくい出し、私は「もう齒も磨みいたしアイスは帰ささいってきてからね。」と用意していたゼリーを与え支度を急がせてしまいました。そしてこの些細な言い争いのせいで、私は子供たちの顔もよく見ずに送り出してしまったのです。しかしそれでも、玄関のほうから「いってきまあ〜す。」と言う元気な声が聞こえてきたのをはっきり覚えているのです。

その日の確か午後の1時過ぎごろでした。子供たちの帰りが遅いのを気にしながら自宅で待っていた時、電話のベルが鳴ったのです。聞き覚えのない女の人の声で「祥子ちゃんが事故あに遭あいました。頭を強く打っているみたいです。すぐに来てください。」と、確かそんな内容でした。私は頭の中がガンガンして何を言われているのかよくわからなくなっていきました。しかし電話の向こうから、聞き覚えのある上の子、峻しゅんの泣きじゃくる声が聞こえてきたのです。怪我けがをしているといけないと思い、体中が震えるのを抑えつつなんとか保険証を探し出し、教えられた事故現場へと急ぎました。車で向かったのですが事故のためか混んでいてなかなか前に進まなくなり、道の脇の駐車場に車を乗り捨てて走りました。途中で祥子の同級生とすれ違いましたが、その子が泣いているのを見たときただならぬものを感じたのです。現場の近くまで行くとすでに人が大勢集まっており、祥子はすでに救急車で運ばれた後でした。私の姿を見つけて学校の先生が傍そばにいらして、「今どこの病院に運ばれたのか調べてもらっています。」と言けが言葉をかけられました。少しして峻が女の人に付き添われてきたのです。そのとき、ふと見た峻のTシャツに血がついていたので、この子もどこか怪我けがでもしているのかと思い調べてみましたが、どこにも怪我けがなどしていないことがわかり安心したのです。その時はなぜ峻の服に血が付いていたのか不思議に思いながらもそれ以上考える余裕はありませんでした。それからまもなく、運ばれた先が県立の救命救急センターである事がわかり、峻と共に先生の車に乗せていただき病院へと急ぎました。しかし、病院に着いてもすぐに祥子に会わせてはもらうことは叶かないませんでした。そこに待機していた警察の方に事故たずのことについて尋ねても、「まだはっきりとわからない。」という返事が返っただけでした。なにがどうなっているのか全くわからない状況の中で、じりじりと追い詰められ

ていくような恐怖にも似た気持ちで押しつぶされそうでした。なんとか待合の椅子に腰掛^{いす}けてはいるものの体がどうしようもなく震え、うまく呼吸もできなくなっていました。初めは指先の痺^{しび}れだったものが体中にまわり、椅子に座^{いす}っているのもやっとの状態になっていたのです。そんな私を当時小学校3年生だった祥子の2歳上の兄、峻が「大丈夫だお母さん、祥子は大丈夫だ、祥ちゃんが救急車に乗せられちゃうとき、『祥子っ！』て叫んだんだ。その時、祥子はちゃんと『お兄ちゃん』って答えたんだ。だから絶対に大丈夫だ。」そう言いながら、ずっと傍^{そば}で私の震える肩を支えてくれていたのです。そしてそんな時でした、同じく事故に巻き込まれたもう一人の子供さんのお母さんが駆^かけつけてきて、すぐに処置室に通されてまもなく、安心したような表情で部屋から出てこられたのです。その表情を見たとき、私はそれまでにない言い知れぬ不安にかられたのです。そのころ主人はというと、新庄まで毎日通っておりましてので、知らせを受けてから山形まで戻って来るのに2時間以上の時を要したのです。私は遂にこらえきれなくなり騒ぎだしたのかもしれませんが。(かもしれない、というのはじつは、ここからの記憶がところどころしかないのです。忘れたと言うのではありません。あまりのショックで私自身、おかしくなりかけていたせいなのだと思うのです。)看護婦さんが私の傍^{そば}に走ってきて、「それでは、お母さんだけ行きましょう。」そう声をかけたのです。すでに私は体中が痺^{しび}れ一人で歩くことができない状態になっていました。看護婦さんに両脇を抱えられ引きずられるようにして祥子の待つ部屋へと向かったのです。しかしそこで待ち構えていたものは、私の必死の願いや峻の想いなどいとも簡単に潰^{つぶ}されてしまう光景だったのです。

まず部屋に入って目に飛び込んできたのは、部屋の中ほどに置かれていたベッドでした。そのベッドは周りを様々な機械で取り囲まれていて、子供が寝せられているのですが、その子供はピクリとも動かないのです。私はただならぬものを感じて、体が一瞬で凍りつくような感覚にとらわれました。「違う、あれは祥子じゃない！」心の中で何回も何回も叫びました。でも声にならないのです。「いや～あ！」声に出せたのはこの言葉だけでした。その時、「鎮静剤^{ちんせいざい}」耳元で低く医者^{ひび}の聲が響きました。私はそのまま両脇をかかえられ別の部屋へと連れて行かれそうになり、あわてて押さえられていた手を振り払い、這^はうようにしてそのベッドの傍^{そば}までいったのです。「もしそこにいるのが祥子なら私が行ってあげなければ。」そう思ったからです。様々なチューブが取り付けられそこに横たわっていたのはやはり祥子でした。しかしその姿はあまりにも変わり果てていたのです。認めたくありませんでした。私

だね。」看護婦さんのその言葉が嬉しくもあり、そしてとても悲しく私の心に響きました。祥子をベッドに寝かせたまま、長く、細い廊下を通り、病院の裏口に出ました。私はその間ずっと祥子の顔を見ていました。目を覚ますのではないかと思ったからです。そして何気なく車に乗せようとしたその時です。いつもは、私の体に吸いつくように抱っこしてくる祥子の体が、鉛のように重く、石のように固かったのです。そんな私の様子を見ていた看護婦さんが心配そうに、私の手のひら一杯の脱脂綿を渡しました。私にはその意味がはじめわかりませんでした。しかしすぐに理解したのです。祥子の顔を少し横にしたときです。脱脂綿をぱんぱんに詰め込まれた口から、それでも真っ赤な血が流れ出し、真っ白なワンピースをみるみる赤く染めていったのです。私は口からの出血を気にしながら家へと急ぎました。亡くなったばかりの祥子を胸に抱き、私はふと車外を見ました。茜色に染まりかけた町の景色がすごく綺麗だったのです。そして祥子が亡くなったのに何一つ変わらない、そんな町の様子が、うらめしく思えてしかたがありませんでした。



家に着いてから、すぐに祥子を思いっきり抱っこしてやりたかったのですが、口からの出血がひどく、そっと寝せてあげることしかできませんでした。たぶん周りでは、お葬式やその他の様々な準備で大変だったと思うのですが、その時の私は時間的感覚がはっきりしないのです。いえ、すべての感覚、感情といったものが麻痺してしまっていたのかもしれませんが。祥子が夏休みに読むために学校の図書館から借りてきていた本を、添い寝しながら読んで聞かせました。それまでも「お母さん読んで。」と、祥子に言われていたのですが、なかなか時間がなくそのままになっていたのです。その間、遠くに住む親戚の方や、お客さん達が来てくれましたが、ところどころしか覚えていないのです。そしていらしてくださった方たちの涙を、まるで他人事のように見ていました。私はとにかく祥子の傍にいたかったのです。一秒一瞬たりとも傍を離れたくありませんでした。何日目の夜、それまで夜ぐずったことのない祥子の弟の弘基が、その夜に限ってなかなか寝付かず、寝かしつけていた私もつい何時間か一緒に寝てしまったのです。目が覚めたときには空が白みかけていました。「何で起こしてくれなかったの！」そう、主人にぐってかかりました。その時の私は食べ物を口にしないで、ずっと祥子の傍にいる状態でしたので、主人は心配して寝せてくれていたのだと今となればわかるのですが、その時の私にはそんな心の余裕はありませんでした。とにかく少しでも長く祥子の顔をみて、傍にいたかったのです。主人の父が、「小さいお棺だと狭そうでかわいそうだ。」と大人用の大きめの棺を用意してくれました。そしてその中に季節ごと

の服や靴、そして大切にしていた赤いランドセル、大好きだった本や玩具などたくさんのも
ものを持たせました。葬儀屋さんも普段はダメと言われるものまで入れさせてくれたのです。
斎場に向かう時、祥子の隣の席だった男の子が千羽鶴を届けてくれました。祥子はなにかと
その子の世話をやいていたそうなのです。お母さんが「ありがとうね。」と祥子の棺ひつぎの上に
花束を置いてくれました。近所の方々に見送られながら車は静かに動き出しました。最後に
学校が見たいだろうからと、運転手さんがわざわざ小学校の校門のところを歩いて行ってく
れました。小学校に行くのが楽しみで買ってもらったばかりのランドセルを背負いながら遊
んでいた祥子の姿が、小学校に入学して朝登校するとき、まるで嬉しうれさで弾むように揺れる
赤いランドセルが脳裏に浮かんで消えました。まだ幼くて一人で寝ることのできなかった
祥子は棺ひつぎに入れられてしまっていて、もはや抱いてあげることも叶かないませんでした。斎場
に着き最後のお別れをした時です。私が「祥ちゃんごめんね。もう抱っこしてあげられない
し、髪かみも結ってあげられない。ごめんね。ごめんね。守ってあげられなくてごめんね。」と、
声をかけ最後のキスをした時です。やっと出血のとまっていた祥子の口から、それに答える
かのように小さな泡がプクプク、プクプクとわきあがり、信じられないかもしれませんが、
祥子の両方の目から涙がこぼれたのです。私はその涙を見た時一人ではやれないと思いま
した。祥子をたった一人では逝いかせられないと思ったのです。私は祥子にしがみつき一緒に逝
こうと思いました。目の前には燃え盛る火がゴウゴウと音をたてているのが見え、ものすご
い熱さを感じました。しかしその時主人が言ったのです。「これ以上家族を失うのはいやだ、
生きていてくれ。」と。そしてその時は気がつかなかったのですが、峻も私の体にしがみつ
き抑えようとしていたとの話を後で聞かされました。しばらくして祥子は灰になってしまい、
祥子の頭があったあたりに私が紙粘土で作ったアンパンマンとキティちゃんの髪飾かみかざりが真っ
黒になって転がっていました。祥子の姿はもうどこにもなく、触れることさえもできなくな
ってしまいました。体が引き裂かれるようでしたが、それでもまだ目の前で起きていること
を受け入れることができませんでした。白い箱に入った祥子を首から下げてもらったとき、
まだほんのりと暖かく、まるで生きている祥子を抱いているようでホッとしたのです。事故
後口からの出血を気にすることなく、おもいきり祥子を抱けたのはその時がはじめてだ
たのです。

お葬式の準備が整い、まるで大きな河にでも流されるようにして、私はいつのまにか式に
出ていました。不思議なことに祥子のお葬式だと言うのに涙が出ないのです。私は祭壇に飾
られてしまった祥子の箱をずうっと見ていました。それからしばらく自分が何をしていたの
かはっきり覚えていません。でも確かなのはいつものように祥子が、「ただいま！おかあさ
ん！」と帰ってくるのをじっと待っていたということです。祥子に会えないのはただちょ
とすれ違っているだけだと思っていた。心の中で、もう少ししたら帰ってくるのだと信

じていたのです。そしてその一方で涙が出ない自分が不思議でなりませんでした。祥子に対する愛情が足りないせいではないか、そんな不安も心のどこかに抱いていたのです。いずれにしてもいっそのまま気が狂ってしまった方が、その後どんなに楽だったか知りません。

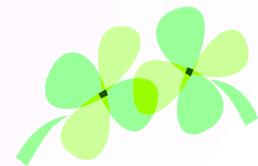
それからまもなくすると、今度は息をするのもままならないほどの体中を押しつぶされるような喪失感と悲しみに襲われました。いくら待っても祥子が帰ってこないことに私自身、霧が晴れるようにはっきりと気が付きはじめたからです。私はのどを渴かして帰って来たであろう祥子のことを考えると、自分がのどが渴いたからといって水を飲むことが申し訳なく思い、また何ひとつ口にするのできなくなってしまう祥子のことを考えると、お腹が空く自分が嫌でたまりませんでした。そしてなにより、祥子が亡くなったのに母親である自分が平気で生きていること自体が許せませんでした。私はものを食べることがだんだんできなくなっていきました。私が傘なんか持たせたから祥子は逃げられなかったんだ。友達にあげてしまったお守りを新しく付け替えてやらなかったのが悪かったんだ。私があの時迎えに行っていればよかったんだ。そう次々に考えるようになり、祥子が亡くなったのは自分のせいだと、自分が何かしたせいだと自分で自分を責めて追い詰めていったのです。

そしてそんな時でした、様々な手続きのため祥子の死亡診断書がどうしても必要となり、祥子が亡くなった病院に私が行くことになったのです。病院のことを考えただけで胸が締め付けられる思いがしました。もう今日行かなければ間に合わないという日、決死の覚悟で出かけました。何回か病院の傍まで行っては引き返しました。しかし早くこの場を立ち去るにはやはり行くしかない、息を止めその病院に乗り込んだのです。診断書は封筒に入った状態で渡されました。中を見ないほうがいいのはわかっていたのですが、気になって仕方がない私は、遂に中を見てしまったのです。それには事故当時、祥子の外見から察しただけではわからない状況がいろいろと書いてあったのです。頭の他にも肺が破裂しており、顎は砕けていました。そして、内臓にもかなりの損傷があったことが判明したのです。あの時、祥子の顔を見たとき、その唇が痛々しいほどに裂けていたのを思い出しました。祥子の痛みを変えてやることができなかった自分が悔しくなり、壁に自分の頭をおもいっきり打ち付けてみました。血が出るまで打ちつけてもこれくらいではまだだめだと、今度は自分で自分の腹をおもいっきり殴りました。しかしそれほど強く叩けないのです。いくらやっても祥子の痛みを代わってやることができなことが悲しくなり、祥子の受けた痛みにさえ近づくこともできない自分が情けなくてしかたがありませんでした。そんなまもなく四十九日が近づく頃、私がいつものように祥子の前に座っていると、そばに峻が来て「お母さんあのね、祥子が救急車に乗せられちゃうとき、祥子「お兄ちゃん」て言ったって話したでしょう。でもねよく考えたら違っていたの。あの時、祥子最後に「お母さん！」って言ったんだよ。」とやってきたのです。

事故当時子供たちは集団下校になっており、最初1、2年生そして次に3、4年生という下校体制になっており、1年生の祥子が事故に^あ遭って間もなく3年生の峻が事故現場に到達してしまっただけです。そして峻は道路に血だらけになって倒れている祥子のそばで、「轢かれたのはぼくの妹だ。」と泣き叫び、祥子が救急車で運ばれた後もそこに置かれていた祥子のランドセルを抱き絞めながら泣きじゃくっていたところを近くの方に保護されたのだそうです。あの時、峻のTシャツに血がついていたのはそのためだったのです。事故後何日かして届いたランドセルを開けたとき、祥子が入学後たどたどしい字で名前を書いた大切な教科書が祥子のその小さな体から流れだした血で真っ赤に染まっていた光景がよみがえりました。事故現場がいかに^{せいさん}凄惨な状況であったか、私はあの時、事故現場の数メートル手前で先生に呼び止められ、幸いにもその悲惨な状況をこの目で見ることはありませんでした。しかし峻は祥子の倒れている姿をその目で見てしまっており、それなのに私のことを気遣い心配してその言葉をかけてくれたのです。祥子を失ってからの日々は、どうすればあの子の^{そば}傍に行けるのかということしか私は考えていませんでした。「母親でしようしっかりしなさい。」「他にも子供がいるんだから。」「泣いてばかりいると、子供が^{じょうぶつ}成仏しないよ。」「わけがわからなくなっていて、生きていられるよりよかったのよ。」「早く忘れて立ち直らなきゃだめよ。」「様々な言葉をかけられていました。どの言葉も私のことをなんとかしてあげたいという気持ちで言ってくださるのだとは、わかっていましたが、その言葉によって傷が一層深まっていったのも事実でした。できることなら社会とのかかわりを断って、家から一步も外に出たくありませんでした。姿を誰かに見られるのもいやでした。祥子を失った悲しみに耐えて生きていくのなら、いっそこのまま死んでしまいたい。そう本気で願っていたのです。私は、峻の言葉でこの世に戻って来られたのかもしれない。

その頃、下の弟の弘基はまだ2歳でしたが、私は事故からほとんど子供の世話などできる状態ではありませんでした。そんなある晩、弘基の^{みが}歯を磨いていて驚きました。前歯を除くほとんどの歯が虫歯になっていたからです。事故がおきる前の歯科検診では虫歯など1本もなかったのに、ショックでした。すぐに歯医者に行き治療しましたが、ひどい虫歯で、泣き叫ぶ弘基の両腕を押さえつけながらの治療となりました。あまりにも嫌がり食べてきたものを全部吐いてしまったこともありました。「こんなになるまで気がつかなくてごめんね。」弘基に^は申し訳なく何度も謝りました。「子供は何かとてもショックなことがあると、あっという間に簡単に虫歯になることがあるんだよ。」主人の友人でもある歯医者さんが、そう教

えてくれました。それから少ししたある日、夜テレビを見ていた弘基が私のそばに来て言うのです。「お母さん、祥ちゃん死んじゃったの？死んじゃったら遊べないの？祥ちゃんと遊びたいな。あのねドラえもんに何か出してもらえないかな。生きている祥ちゃんにするやつ。」まだ2歳で何もわからないだろうと思っていたのに、弘基は弘基なりに姉の死を重く辛く受け止めていたのです。そのことに気づいたとき私は、この子達のためにもそしてたった一人で逝^いってしまった祥子のためにも、今なにをしなければならぬのか、少しずつですがやっと考え始めたのです。しかしその後、そんな私ども家族の必死の思いなどあざ笑うかのような出来事が待ち構えていようとは、その時の私には想像もできなかったのです。



祥子を殺した加害者はなかなか謝りに来ませんでした。交通事故というものに全く無知だった私は、加害者はすぐに捕まり留置場に入れられており、そのために謝罪に来られないのだろうと思い込み、加害者も同じ3人の子供を持つ母親であると聞いて同情さえしていたのです。ところがそれが私の大きな思い違いであることが徐々に明らかになっていったのです。加害者はその日のうちに家に帰り、事故前となんら変わらない普段の生活を送っていたのです。それならなぜすぐに謝罪に来なかったのかはいまだにわかりません。ただ加害者のご主人は事故の次の日あたりに来ていたようです。私は何もわからずに丁寧にお礼を言った覚えがなんとなくあるのです。そして、事故後1か月以上過ぎるころになっても事故そのものに関しては、糖尿病の持病のある加害者の車が、小学生の列に急に突っ込んできたという程度の情報しか耳に入ってきませんでした。事故直後は新聞やその他の報道を見れる状況ではなかったのですが、きっとそのうち警察から詳しい説明があると思って待っていました。しかし何の連絡も無かったのです。ただ事故のときに祥子が着ていた服を、証拠品の確保ということで警察が保管することに対する同意書に印鑑を押さなければならず、警察署に呼ばれ出向きました。主人だけが呼ばれたのですが、私も一緒について行きました。写真での確認でしたが、「お母さんは、見ないほうがいいですよ。」と、担当の警察官に止められました。私はその日祥子が着ていった服のことがとても心配になっており、それでも見せてくれるように頼みました。写真を見て、なぜ止めてくださったのかをすぐに理解しました。当日祥子の身につけていた服は血で染まり、引き裂かれたような状態だったのです。その写真は今もこの目にしっかりと焼きついていますが、それを見たことへの後悔はありません。毎朝、祥子の着る服は私が選んでいたのですがその日の記憶だけが、なぜか曖昧あいまいでずうっと気になっていたからです。その日祥子が着ていたのは買ったばかりの彼女のお気に入りの服だったこと

がわかり、なぜだかとても安心したのです。警察ではその時も、これといった事故に関しての詳しい説明はありませんでしたが、ただ気になったのは「加害者がはっきりしない。」というようなことを言われたのです。加害者はその場で一度捕まっているのになにがはっきりしないのか、不思議に思いながらも帰ってきたのです。



平成8年8月18日、その日は事故から1か月過ぎた月命日でした。朝からお参りにきてくださる方たちを迎え、忙しく一日が過ぎていきました。夕方になり親戚しんせきに預けていた子供たちを迎えに行くため家を留守にした時でした、母しかいないところに加害者が突然来たのです。家に帰りそのことを聞きとてもショックでした。主人も私もまだ一度も加害者の声すら聞いたことがなかったのです。そしてさらに、そのとき母の口から気になることを聞いたのです。加害者は旦那だんなさんと一緒に来たらしいのですが、母が言うには祥子の前で謝る様子も無く、にやにやしていたというのです。おもわず母が腹をたて、「おたくの奥さん少し変なんじゃないの、謝りもしないで。」といった時、「はい、うちのは少し変なんです。」と旦那さんに言われたとのことでした。このことは後々、私たちに思いがけない仕打ちが襲い掛かることにつながって行ったのです。

四十九日しじゅうくにちが過ぎたころ、警察から事情聴取じじょうちょうしゅの呼び出しを受け私一人で出かけました。広い部屋の片隅に小さな部屋がありそこで行われたのですが、自分は何も悪いことはしていないのに警察の門をくぐるのもなんだか重たい気持ちになりました。ましてや取調べをうけるような思いがしてその部屋に入るのも嫌でした。周りにいた人に変に見られているのではないかと、人の目がとても気になりました。事情聴取じじょうちょうしゅは警察の方と私の一対一で行われ、事故に関してと、祥子のことに関して聴かれたような気がします。しかしこのときも、事故について私はほとんど何にも知らされてはいなかったため、ただ聴かれるままに答えていたように思います。しかし最後に、「加害者に対してはどう思いますか？」と尋ねられ、「今はなにも考えられない。」とだけ答えたのははっきり覚えているのです。家に帰った後でそのことを弁護士の方に伝えたとき、「その言い方だと、加害者を許しているように捉えられてしまう。」と指摘され、またその事情聴取じじょうちょうしゅの内容が今後の裁判などにおいて、大変重要な証拠となっていくということを教えられたのです。私はそのような説明を、警察のほうから一切受けていませんでしたので驚きました。そしていそいでその箇所の訂正をお願いする電話をかけ、

「いまは、祥子を失った悲しみが強すぎるために、加害者に対する気持ちが麻痺している状態なのですが、加害者に対しては嚴重な処罰を願っています。」と担当の警察官に伝えたのです。そしてその後も警察の方からは一切、事故の説明はありませんでした。

加害者の代理人だという保険会社が突然来たのも、ちょうどそのころでした。戸惑う私たちに「今回の事故は加害者側が100パーセント悪い。」と言ったのです。私は「保険のことは何もわからないので、全て弁護士の方にお願いしてあります。」と答えるのが精一杯でした。「それじゃ話が早い。」そう言うや否や、ろくろく祥子に手を合わせることも無くさっさと帰って行ったのです。加害者の代理として来たにしては、そのあまりの態度に驚きました。そしてそれから間もなくでした、信じられないような通知が送られてきたのです。それはいわゆる命の値段が算出された書類だったのですが、内容を見て愕然としました。あまりにも誠意の無いものだったからです。弁護士の方もあまりの内容にびっくりされていました。それが祥子の命の値段とは考えたくありませんでしたが、あまりにも祥子が不憫でいたたまれなくなり、私自身、叩きのめされる思いがしました。その後も保険会社との話し合いがなかなかつかず、仙台の紛争処理センターにおいて調停を行うことになったのです。

交通事故の調停を行う紛争処理センターは東北6県のうち、仙台にしかなく大変に混み合いました。主人はその度に仕事を休み、弁護士と一緒に出かけに行ったのです。しかし加害者は保険会社に任せっきりで一度も顔を見せることはありませんでした。そしてその話し合いは半年以上にもおよび、また事実のみの確認だけで被害者感情を述べることは一切許されませんでした。自動車保険には自動車損害賠償責任保険（自賠責）と任意保険がありますが、事故がおきた場合、その事故状況から算定された保険料のうち、自賠責から最高で3000万円が、そしてその残りを任意保険が補うという仕組みになっているのです。算定額の計算方式にはライブニッツ方式とホフマン方式があり、そのどちらの計算方法を取るかはだいたい地域できまっており、この2つの計算方法で同じ事故の算出額を比べてみると2、3百万の差が出るケースもあるのです。また今は男の子と女の子の逸失利益（その人が死ぬまでに得る報酬から生活費や教育費を差し引いた金額）を均等にしようという動きになっていますが、祥子のときは小学生の女の子ということで、その算出されてきた額は驚くほど低いものとなって提示されてきたのです。よく交通事故だと大金が入ったのではと思われがちですが、それはとんでもない誤解だと私は思います。祥子の一周忌がまもなくという時期でした、紛争処理センターより和解額が出されたのです。「和解すれば加害者の罪も軽くなる可能性もあるので、よく考えて下さい。」そう弁護士には告げられました。事故後ほとんど顔も見せない加害者の罪が軽くなるのは、到底許されることではありませんでした。しかしそれまでに何回か出された保険会社からの調停額を聞くたび、私どもは胸を突き刺されるような思いを味わい、私は叩きのめされるようで気が変になりそうな状態に陥っていたのです。

もうそれ以上痛めつけられることに対して心が限界にも達していました。紛争処理センターと保険会社は紳士協定^{しんし}で結ばれており、その提示された額を保険会社は受け入れなければならないのです。紛争処理センターが出してきた和解額はだいぶこちらの意思を汲んで下さったものにはなっていました^{ちようてい}が、それでもとても納得のいくものではなかったのです。しかしいろいろ迷ったあげく私どもはとにかく心安らかに祥子の一周忌^{いっしゅうき}を迎えたいと、煮え湯を飲む思いで調停^{ちようてい}に応じる決心をしたのです。しかしその和解の日保険会社は来ませんでした。

「今回の事故は加害者が心神喪失^{しんしんそうしつ}の状態^{しんしんそうしつ}で起きたものであり無責である。したがって今回の調停^{ちようてい}にはなじまない。」という通知を突然送りつけてきたのです。「心神喪失^{しんしんそうしつ}の状態^{しんしんそうしつ}」とは、よくテレビ番組などで、犯人に責任能力があったかどうかで争われるときに使われる言葉であることは知っていました。しかしこの言葉がこんな場面で持ち出されることになろうとは思ってもありませんでした。これにより交渉はできなくなり、それまで半年にも及んだ調停^{ちようてい}が全て水の泡となりました。保険会社は自分たちに不利な状況になったとたん、手のひらを返すようにして私どもの思いをズタズタに踏みにじったのです。あの時、私たちの前で、いえ、祥子の前で「加害者が100パーセント悪い。」とはっきり言ったのに、どういうことなのかわけがわかりませんでした。



私は祥子を失った後、社会との関わりを避けていました。外出もできるだけしたくありませんでした。それでも買い物に行かなければならないときには、わざわざ遠くのスーパーまで出かけ、すぐに逃げるようにして帰ってきました。そしてそれでも思わず知り合いの人と会いそうになると、急いで見つからないように隠れていたのです。上の子の用事でどうしても学校に行かなければならないときには、目に見えない^{よろい}鎧を身に付けていくような状態でした。今思うと、自分の周りにとてつもなく大きな壁があったように思います。それは私自身の問題と、まわりの方々が私に対してどう接していけばいいのかわからないためにできてしまったものかもしれません。学校ではそれまでとは全く違う所へたった一人だけ、置き去りにされているかのようでした。まるで針のおしろに座らせられているような感覚に襲われ、今まで友達だと思っていた人たちとも、うまく付き合えなくなっていました。そして仲のよさそうな親子の姿を見ると、無性に悲しく気が変になり、思わずその親子のほうにハンドルを切りそうになる自分が恐ろしくてなりません。心配してきてくれる友人の言葉をありがたいと思いつつも、「家に帰ればあなたの子は、元気であるからいいわね。」そう心の裏側で友を妬^{ねた}ましく思ってしまう自分が情けなく、ますます人に会えなくなり、外に出られなくなっていったのです。

自分と同じ思いをしている人に会ってみたい。そう考え始めたのもその頃からでした。そしてたまたま市報で、「めんどりの会」(小野寺会長)を目にしたのです。そのころの「めんどりの会」は子供を亡くした母親の会でした。会が行われているその日、話し合いがなされている部屋のドアを恐る恐る開け中に入りました。その日参加されていたのは10名ほどのお母さんたちで、ほとんどの方が病気で子供さんを亡くした方たちでした。しかし、その方たちの話を聞いたとき私それまでに感じたことの無かった強い共感の思いに包まれたのです。そしてこんな苦しい思いをしているのは自分だけではないことにはじめて気づき、なんだかとてもほっとしたのを覚えています。私にとってこの会との出会いが無ければ今ここにこうしていることは、できなかつたかもしれません。家族の中で祥子の話題に触れることはタブーでした。そんな中、誰にも話すことのできない想いを吐き出した時、心が少しずつですが軽くなっていくのを感じたのです。それからしばらくしてからでしたが、その会の企画として男女共同参画センター“ファーラ”の市民企画講座に応募することとなり、私もその講座のなかで、自分の想いを社会に訴える機会を得たのです。

企画講座で話す以上は、事故のことと正面から向き合わなければなりません。私は自ら事故について調べるために警察に出向いたのです。ところがもう書類は検察に送られているので特に話せることはないと言われました。何日か前の新聞にこの事故が書類送検され

たことが載っていたことを思い出しました。それではせめて加害者の免許の処分についてどんな結果になったかだけでも知りたいとお願ひしましたが叶いませんでした。そのころはまだ、公安委員会が下す行政処分の決定でさえ加害者のプライバシー保護のために一切教えていただくことができなかったのです。事故については糖尿病の持病のある加害者の車が、横断歩道を祥子が渡り終えた直後に突っ込んできたということしか教えて頂けませんでした。そのときの担当だった警察官がすまなそうに、「じじょうちようしゅ 検察から事情聴取の連絡があるはずだから、それを待っているように。」と教えてくれたのです。しかしなぜ被害者の親なのに詳しい事故状況を知ることもできないのか不思議でなりませんでした。そんなとき、「のこ 遺された親たち」という本があることを、「めんどりの会」の方に教えていただきました。それは交通事故で子供さんを失った方たちのことが書かれた本だったのですが、書いてあることが全て自分の事故と重なりました。読んでいくうちにどうしてもこの本を書かれた方と話がしたくなり、出版社に電話をかけ連絡先を教えていただいたのです。著者のさとうみつふさ 佐藤光房さんは、ご自身もじょうさま お嬢様を交通事故で亡くされた方でした。突然の電話にもかかわらず佐藤さんは私の話をしっかりと受け止めてくださり、これから何をしていかなければならないのかを丁寧に教えてくださったのです。「全国交通事故遺族の会」という組織があるということもその電話ではじめて知りました。私は早速教えられた遺族の会の電話番号を押したのです。そしてその電話は運良くすぐにつながり、私は交通事故遺族の会の代表、い 井出会長の奥様と話をすることができたのです。今までの経緯を涙で声が詰まりながらも必死で伝えました。「今まで一人で戦ってきて大変でしたね。同じ思いをしている方たちが全国にたくさんいらっしゃいますよ。」私の話を聞いた後井出さんから静かにそうかけて頂いた言葉に、長い長いトンネルの中で一筋の光を見いだしたそんな思いがしたのです。当時はインターネットもあまり使われていない時代で、被害者が同じ被害者の情報を知ることもなかなか困難な状況だったのです。そしてその後に「全国交通事故遺族の会」から届いた交通事故に関しての様々な資料には、信じられない内容が書かれてありました。一口に言ってしまうと交通事故は加害者には甘く、被害者に冷たいものだったのです。

その資料を読んでいくうちに、検察庁からの連絡がなかなか無いことに、不安を覚え始めていきました。じじょうちようしゅ 「事情聴取について検察に確かめて欲しい。」と主人に話しましたが、「心配することは無い。」と言われました。しかしそれでも心配だからと頼み、弁護士を通じてじじょうちようしゅ 事情聴取の件を確認してもらったのです。恐れていたことが現実になりました。「被害者側からの事情聴取は一切考えていません。」との驚くべき返事が返ってきたのです。これには主人も言葉を失ってしまいました。じじょうちようしゅ なぜ事情聴取をしてもらえないのか、その説明さえもありませんでした。検察からのじじょうちようしゅ 事情聴取があれば、きっとなにか事故についてわかるはずだと、そ

れだけを信じて私たちはひたすら待っていたのにショックでした。どうしていいかわからなくなり、遺族の会の方に相談したのです。すると、まず上申書じょうしんしよを作成し担当検事宛じょうしんしよに送ることを勧められました。早速主人は上申書じょうしんしよを書き担当検事を調べ送ったのです。この上申書じょうしんしよは、祥子の話題に触れるだけで嫌がった主人が、泣きながら必死の思いで作成したものでした。しかし送付後、何日たっても検察からの連絡はありませんでした。遺族の会の方にこのことを伝えると「被害者は、頑張っ、頑張っもうこれ以上できないと思ってからも、さらにもう一頑張りしなければならぬのが、今被害者が置かれている現状なのです。」といわれ、手紙を書いてみたらどうかと教えられたのです。私は薫むらをもつかむ思いで、担当検事宛に自分の思いをしたためた手紙を送ったのです。一週間が過ぎもうだめかと思いきりあきらめかけていた時でした、担当検事から一度会って下さるとの連絡がやっと入ったのです。こうして私と主人はついに検察庁に足を踏み入れることができたのです。そのころの私たちにとって検察庁は、遠く雲の上の存在でした。敷居がとても高く感じられたのです。やっとの思いでお会いすることのできた検事さんに、自分たちの思いをなんとか必死で伝えました。検事さんも「今回の事件は難しいところがあるが、自分にも子供がいるのでお気持ちはわかります。何とか頑張りたい。」とおっしゃって下さったのです。事故状況たんがんしよに関しては加害者が病院から帰宅する途中であったこと、そして自分の罪の軽減たんがんしよを願う嘆願書たんがんしよをかなりの数集め、提出していたこと以外は新たな情報を得ることはできませんでした。嘆願書たんがんしよの存在はショックでした。どんな方が署名したのか、どんな事故だったのかわかっていて署名したのか、私は署名した1人1人に会いに行き署名理由を聞きたいと思いましたが、「そんなことをしても無駄だ。」と主人に止められ悔しさに涙がこぼれました。それでも検察からの帰り道私たちは直接検事に会い気持ちを伝えられたことで、もうこれで大丈夫だという久々の安心感に包まれていたのです。



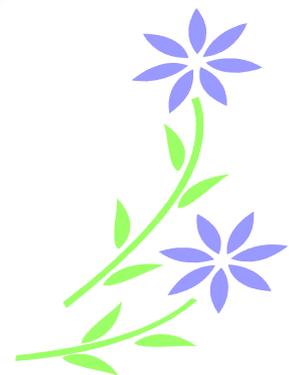
実は私はそのころお腹に第四子目を授かっていました。祥子が亡くなってしばらくすると、私は祥子をもう一度生みなおしてやりたいという思いにかられていたのです。平成9年12月14日、私たち家族に新しいメンバーが加わりました。私はその出産に峻を立ち合わせました。祥子の死を目の前で見てしまった峻に命の誕生^{たんじょう}という場面にどうしても立ち会ってもらいたかったからです。病院側も私の思いを聞き入れてくださり、主人が一緒であればという条件で認めてくれました。「お母さん、頑張れ、頭がでてきたよ。あっ、耳も見えた。」と峻は分娩室^{ぶんべんしつ}で大騒ぎでした。そして生まれたばかりの赤ん坊を見て「かわいい！」と叫んでいました。その時生まれた子は男の子で、「雄基^{ゆうき}」と名づけました。峻は一時も雄基のそばを離れないというほど、かわいくてしかたがない様子でした。(雄基は祥子の生まれ変わりなどではないことは十分わかっていました。その時の私には新しい命を迎えることで自分を維持していたのかも知れません。一番私が大変な時に本当に情けなかった母親の所に生まれてきてくれた雄基に今とても感謝しています。)

そんな状況のなか、ばたばたとその年も終わり新年を迎えても、また検察から何の連絡もなくなりました。主人は「まさか大丈夫だろう。」と言っていました。私は確かめてほしいとお願いし、弁護士にその後について確認の電話をかけてもらったのです。なぜいちいち弁護士を通したかと言うと、検察に私たちが勝手に連絡を取ってはいけないような気がしていたからです。それほど私たちにとって検察は遠い存在だったのです。そしてその検察からの答えは簡単なものでした。「去年の12月末の28日に不起訴^{ふきそ}で終わっています。」という返事だったのです。「不起訴^{ふきそ}」それは加害者が何の罪にも問われないということです。何も悪くない祥子を殺したのに加害者は何の罪にも問われなかったのです。心の中で何かが音を立てて崩れていくのを感じました。それまで私たちを守ってくれていると信じていたものが何もなくなってしまったようでどうすればいいのかわからなくなっていきました。到底^{どうてい}それでは納得がいくはずはなく、何とか不起訴^{ふきそ}の理由が知りたいとお願いしましたが、「もう終わっている事件なので、答えられない。」と言われ「担当した検事さんに話がしたい。」とお願しても、「転勤になってもうここにはいない。」という返事で、取り付く島さえもありませんでした。そして当時は不起訴^{ふきそ}になった場合、事故に関しての一切の書類を被害者側は見ることができないことを私たちはその時はじめて知ったのです。何故祥子は死ななければならなかったのか、その事故内容も何一つ、知ることができなくなってしまったのです。何も悪いことをしなければ守ってくれると信じていた司法に背を向けられ地獄^{じごく}に突き落とされたように感じました。祥子に合わせる顔がありませんでした。私はこんな世の中に祥子を生み出してしまったこと自体を祥子に謝りました。「もっといい世の中だと思ったのにごめんね。」そう何度も謝り続けました。もう方法は残っていないのかと思いあぐねていた時です、検察に行き通された待合室で、なにげなくもらってきたパンフレットのことを思い出したのです。

それは検察審査会に関するものでした。検察審査会というのは、検察の決定に対して不服がある場合、申し立てを行える唯一の機関で、検察で出された決定が一般の方が考えて妥当かどうか協議する場所なのです。しかしここで出された結果を取り上げるかどうかの決定権は全て検察側にあり、また不起訴が審査会において起訴相当もしくは、不起訴不当の決定が出されるのはほんの少ししかないということでした。しかもその審査の結果をさらに検察が取り上げるのは、その中のわずか数パーセントに満たない状況ということで、祥子の件も不起訴が覆される可能性はほとんど無く諦めた方がいいという説明を弁護士から受けました。しかし私たちはそのわずかな可能性に懸けたのです。もう残された道はそれしかなかったからです。そしてその間も、何とか検察に不起訴理由を確かめたいと願い、何度か検察に手紙を書いたのですが取り合ってもらえませんでした。

そんな時「めんどりの会」の小野寺さんの紹介で、ある新聞記者の方にめぐり会ったのです。その記者の方は私たちの事を知り、その想いを記事にして下さいました。そして自ら検察に乗り込んで抗議して下さいたようなのです。次席検事から会うという連絡が入ったのはそれからまもなくでした。私どもは不起訴理由が聞けるものだと思っただけで出かけていたのですが、しかしそこでも歯切れの悪い答えしか返ってきませんでした。「今回の事故の加害者には糖尿病の他にも病気があることが、取調べをしていくうちに明らかになった。この病気に関しては加害者本人も自覚しておらず、事故がおきた原因が糖尿病によるものなのか、それとも新たにわかった病気によるものなのかははっきりしない、したがって、嫌疑不十分ということで今回の事故は不起訴になった。」との説明を次席検事より受けたのです。この新たな病気があったということは、その時はじめて知りえた情報でした。「それでは、その病気とは何ですか。」と尋ねると、「加害者のプライバシーに関わる事なので、教えられない。」と断られてしまいました。そんな説明をいくら受けても、その加害者が祥子を殺したことは明らかなのになぜ処罰されないのか、納得いくはずがありませんでした。そしてあくまでも守られる加害者の人権というものが、悔しくてなりません。「それならせめて起訴されたか不起訴になったかどうかだけでも、教えていただきたいかった。」最後にそう言った時です、「お母さん、検察は忙しい、起訴されたか、不起訴になったかなんていちいち被害者に教えていたら検察は人手がいくらあっても足りないですよ。」そう笑いながら言われてしまったのです。私にはもう返す言葉がありませんでした。検察においては多くの仕事の中の書類上の一つの処理で終わってしまったことかもしれませんが、祥子の命まで軽々しく扱われたような思いがして、悔しくて、悲しくてしかたありませんでした。(ちなみに現在は被害者通知制度ができましたので、検察はその決定を被害者に教えなければならなくなりました。) 家に帰り警察に検察での一件を説明したところ、「どうしてもその病名が知りたいのな

らば、加害者に直接聞くしかありません。」と言われました。加害者に聞くことなど考えた
だけで息が詰まりそうでした。しかし意を決して電話をかけたのです。電話にでたのは加害
者本人でした。「私、^{のうなんかしょう}脳軟化症なんです。」受話器の向こうからはじめて聞いた加害者の声が
聞こえてきました。医者^{のうなんかしょう}の友人に確かめましたところ「脳軟化症」と言う言葉は、現在では
あまり使われておらず、「^{のうこうそく}脳梗塞」もしくは「^{のうけっせん}脳血栓」を意味しているのではないか、と言
われました。しかしそれがたとえ原因だとしても、祥子が殺されたことは変えようの無い事
実なのに、それがなぜ^{ふきそ}不起訴になってしまったのかやはり私には理解できませんでした。また
今にして思えば、この病気が判明したとたん、それまでとは全く違う態度を保険会社が取
り始め、「^{しんしんそうしつ}心神喪失」を理由にして加害者の無責を主張してきたのです。しかしこのことは
次席検事に会わなければ、到底^{どうてい}私たちには知り得ない情報でした。その病気のことをなぜ保
険会社は知りえたのか、いったいつの時点でどこから入手したのかなど、今となっては調
べる手立てはありませんが、私たちにとってこのことは、それまで考えもしなかった加害者
のプライバシー保護という壁の厚さを思い知らされた出来事だったのです。それにしても、
殺された被害者の親には事故に関して何一つ知る権利がないのに、保険会社にはそれがあ
るのこののでしょうか、もしそうだとすれば、あまりにも被害者を馬鹿にした話だと思えて
なりません。



検察審査会の結果が出るまで、半年近くかかりましたが、しかしこれは審査期間としては
短い方だということでした。待ちに待ったその結果は「^{ふきそ}不起訴不当」でした。私たちはこの
結果を受けやっとなで胸をなでおろしたのです。やはり一般的に考えても今回の事故の^{ふきそ}不起訴は
おかしいということが示されたからです。それまで信じていたものにも次々と裏切
られ続けたせいで、私たちは完全に自信を無くし、自分達の方がもしかしたら間違っている
のではないかという不安な気持ちに陥りはじめていたのです。ですからこの結果を受けて自
分たちは正しい、そうやっとなで確信することができたのです。しかしそれでもまだまだ安心は
できませんでした。この決定を^{わず}検察側が取り上げてくれる可能性は僅かしかなかったからで

す。そんな中でした、突然新しい担当検事から会いたいという連絡が入ったのです。私たちにもやっと微かな希望が見えた瞬間でした。

新しく担当になった検事さんとはじめてお会いした時、それまで感じることの無かった意気込みと、力強さのようなものが伝わってきました。「この人をもう一度だけ信じてみよう。」そんな気持ちにさせてくれる方でした。私はそれまで溜め込んでいた自分の気持ちを検事さんにぶつけていったのです。「検事さんにお会いできるよう、手紙を書くつもりでおりました。」と伝えると、「私はどんな事件でも、被害者側の心情は、きちんと聞く必要があると考えています。」そう話され、私の話を半日かけて聞いてくださり、それを書類として作成してくださったのです。そして「お母さん、私はこの事件をきちんと起訴するつもりでいますので、安心してください。」と言われたのです。それから少しして加害者は在宅起訴されていったのです。こうして事故から約3年経ってやっと、刑事裁判が開かれることとなりました。夢にまで見て願っていた裁判でした。「これでもう大丈夫だ。」そう思っていました。しかしそれは新たな戦いの幕開けだったのです。

第一回公判の日、多くの友人や親戚の方、そしてマスコミ関係の方が大勢来て下さっていました。それにより私はとても心強いものを感じ入廷して傍聴席に座ることができたのです。裁判の傍聴など生まれて初めての経験なので大変緊張しました。私は公判の前に裁判所に祥子の遺影持込のお願いの電話をかけていました。「加害者を威圧するような大きいものでなければかまいません。」との了解を得ることができました。「祥子は自分を殺した加害者の裁判など見たくは無いだらう。」と、主人はこのことに関しては反対でした。私はそれでも祥子の写真を法廷に持ち込みたかったのです。それは、加害者を威圧するためでも祥子に裁判を見せたいためでもありませんでした。私は裁判官に今回の事故の被害者を、書面上の被害者、渡邊祥子ではなく、一人の人間として見てもらいたかったからなのです。一言も口をきけず亡くなっていった祥子のことを人として捉え、裁判を進めていってもらいたかったのです。裁判官が入廷し、次にそれまで顔もよく見たことの無かった加害者が呼ばれ裁判が始まりました。事故について謝罪の言葉が聞けると思っていたのですが、加害者からは最後まで一言の謝罪の言葉は無く、それどころか私どもの予想を覆し、気持ちを踏みにじる言葉が待ち構えていたのです。事故の際加害者は、祥子を撥ねたのもわからない状態にあったため責任が無いと無罪を主張し、全面的に争う姿勢を取ったのです。その間私どもはその裁判の成り行きを、傍聴席からただ黙って見ていることしかできませんでした。もし大声を上げたりすれば、たとえ被害者の遺族といえども即退廷を命じられてしまいます。私は必死に泣き声を

押し殺し、加害者の言い分を聞いているしかなかったのです。そしてその後裁判は、加害者の目がかすむなどした時点で事故^{よけん}を予見し、それを回避できたか否かで争われることになったのです。それから様々な書類のやりとりがあった後のことでした。加害者側は検察側が提出した書類に誤りがあると主張してきたのです。それは検察側が裁判所に提出した加害者の供述調書に関しての記載についてで、その調書を取られる際、検察官から大きい声で怒鳴られたため、しかたなく話をしたもので真実とは異なると言い出したのです。それまでどんな場面においても、冷静に判断し裁判に臨んでいた検事さんが、必死に自分の感情と戦いながらそのことに関して、自分の対応の潔白さを訴えたのです。それまで何回か検事さんにお会いしていましたので、加害者が言うような態度を人に対して取るような方ではないことはわかっていました。加害者側が自分の不利な部分をごまかそうとして、そのようなことを言い出したことは明らかだったのです。「自分の犯した罪ときちんと向き合ってほしい。」私たちのせめてもの願いも加害者に届くことは無かったのです。加害者は裁判において自分の行動に関して様々な釈明ができますが、被害者遺族には自分の気持ちを話す権利がその頃は与えられていませんでした。私は検事さんに自分の想いを裁判官に直接訴える機会を作って頂きたいとお願いをしました。「わかりました。それなら裁判官宛に手紙を書いてください。私がそれを裁判官にお願いの書類として提出してみます。」と言われたのです。裁判官に手紙を書けと言われて戸惑^{とまど}いましたが、なんとか書き上げ担当検事に送りました。私はこうして自らが証言台に立ち、直接裁判官に心情を述べる機会を得たのです。やっと与えられた、ただ一回きりのチャンスでしたが、私のすぐ脇には顔をもよく見たことの無い加害者がおり、気持ちがどうしても高ぶってうまく話すことはできませんでした。それでも私はいかにそれまで祥子を大切に育ててきたか、そしてその祥子の命が一瞬にして一方的に奪われた悲しみと苦しみ、絶望感を必死に自分の言葉で裁判官に伝えたのです。

裁判がはじまったことによって、それまで私どもには知りえなかった様々な事実が明らかになっていきました。加害者は事故以前にも勤め先等で気分が悪くなり、何回か意識を失って倒れた経験があること、そして皮肉にもその日、祥子が運ばれた救命救急センターのある県立病院にて糖尿病^{ちりょう}の治療を受け、インシュリンの注射を受け帰宅する途中であったこと、事故の起きる1.9kmも手前から蛇行運転^{だこう}をしており、回りの車がいっせいにクラクションを鳴らすほど異常な運転であったこと、またなによりその途中の信号機ではきちんと止まり、また縁石やガードレールなどの障害物はきちんと回避していたことが次々に明らかになっていったのです。事故から4年近く過ぎた平成12年3月3日、遂に判決が言い渡されたのです。その日はちょうど祥子の10歳の誕生日でした。禁固1年3か月、執行猶予3年、保護観察付の有罪判決でした。有罪にはなったものの、残念ながら犯した罪に対しては軽すぎる判決だ

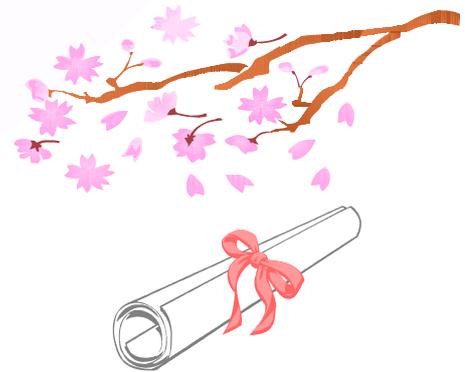
と思いました。加害者は反省しているということで、罪が軽くなったのですが、私にはそうは思えませんでした。また加害者自身も命を落としかねないような状態だったのに、なぜ家族はそのままハンドルを握らせておいたのか、家族にも今回の事故の責任があると思いました。最後に裁判官が言い渡しをした中に「今まであまりにも被害者に対して謝罪をしてこなかった。今後は被害者遺族に対してきちんと謝罪の念を示すように。」との一節が含まれてはいたものの、^{とうてい}到底納得のいく判決ではありませんでした。「なんとか上告してほしい。」と検事さんをお願いしましたが、以前の判例から見ても交通事故においては決して軽い判決ではないと言われ、結局その願いを聞き入れてもらうことは叶いませんでした。^{かな}

それでも有罪判決を勝ち取り裁判が終わったことで、私は祥子が「お母さん頑張ったね。」とひょっこり帰ってきてくれるような不思議な気持ちを抱いていたのです。しかしいくら待っても祥子が戻ってきてくれることはなく、どんなに努力しても、頑張っても祥子の声を聞くことさえできないのだという現実が再び辛く悲しくのしかかってきたのです。それからしばらくは、心にぽっかりと穴があいてしまったような日々が過ぎて行きました。そしてその年の判決言い渡しから4か月後の命日、朝から気持ちが動揺していました。加害者が来るかもしれないと思ったからです。お参りの方々がいらっしゃる度にそわそわしている自分を感じていました。しかしその日の昼が来て夕方になり、ついに夜になっても、加害者は顔を見せるどころか花ひとつ贈ってこなかったのです。私はその時、心の底から加害者への憎しみを感じました。以前加害者が尋ねてきた時、私は血が急に下がったようなショック状態になり倒れてしまい、「二度と来るな。」と主人が言ったことは確かです。しかしそれでも私は、加害者がきちんと祥子に謝ってくれるのを、心から待っていたのです。結局その後加害者からは今日までお線香の1本もあげてもらったことが無いのです。そんなある日、本を読んでいて保険会社マニュアルというものがあることを知ったのです。そこには事故を起こし、加害者となってしまった場合の被害者への対応のやり方が書いてありました。私はそれを見て愕然としました。^{がくぜん}なぜなら、加害者が私たちに対しておこなって来たことがそのまま載っていたからです。また加害者の旦那^{だんな}さんは保険会社に勤めており、会社の中で「うちの家内は、保険に入っていたから大丈夫だったんです。だからどんどん車の保険をお客に勧めてください。」とのことを、その会社のサービスレディ達に話しをしていたということその会社に勤めていた方から聞いたのです。私は頭を殴られるようなショックを受けました。しかし判決が下った今となっては、もうどうすることもできませんでした。「判決の時、裁判官がきちんと謝罪しなさいと言ったのに、加害者はそれを守っていません。どうにかありませんか。」私は耐え切れなくなり、そう裁判所に電話をかけたのです。「お金のことで

か。」と言われ、「いいえ違います。きちんと謝ってほしいのです。」と答えると、「それならば、もう一度簡易裁判所の方に申し立てを行ってください。」と言われたのです。何かの間違っている。そう思いました。裁判所は裁判において言い渡した言葉に対して、もっと責任を持っていただきたいと叫びたい衝動にかられたのです。もし仮に簡易裁判所に申し立てを行ったとしても、加害者側からは、「すいませんでした。」の言葉が返ってくるだけなのはわかりきっています。そんなうわべだけの謝罪を私たちは望んではいけないのです。交通事故に限らず被害者側が加害者に対して、厳罰を望むのは自分の犯してしまった罪から逃げることなく、自分の罪と真剣に向き合い考え、受け止めてほしいからです。決して憎しみ、憎悪だけでそう願っているわけではないのです。ところが今の日本の法律は加害者の人権と社会復帰に重きを置きすぎるがために、一番救われなければならないはずの被害者、そして被害者遺族の気持ちを置き去りにしているように思えてなりません。

平成14年、この年祥子は小学校を卒業し中学生になるはずでした。実はその卒業にあたって私はさんざん迷った末、「卒業証書をいただけませんか。」と小学校にお願いの電話をかけたのです。他の方たちに聞かれると笑われるかもしれませんが、私は生きている他の子と同じように、できるだけのことを祥子にしてあげたいと願っているのです。しかし祥子はほんのわずかな期間しか小学校に通っていないため、無理かと思い何度もあきらめようとしてきました。しかし後で悔やむよりやるだけのことはやってみようと思ひ決心し自分の想いを先生に告げたのです。そんな突然の電話にもかかわらず「こちらから言わなければならないことでしたのに、お母さんには辛いおもいをさせましたね。」そう校長先生が私の気持ちを受け止めてくださったのです。涙が溢れて止まりませんでした。実はそれについて校長先生たちの間でも、いろいろと考えてくださっていたとのことでした。私が住む地区の小学校の卒業式は、新しい中学の制服に身を包み出席するのが卒業生の恒例となっており、その日の私は耳をふさぎ目を伏せ、その一日が過ぎるのをじっと待っていたのです。あんなに大好きだった小学校に、わずか3か月ほどしか通うことのできなかつた祥子のことを思うと胸が苦しくなり、周りが卒業の話題で盛り上がっていることに、耐えることに必死でした。しかしその卒業式が終わったすぐ後で、校長先生、そして祥子の担任だった先生を含め4人もの先生が忙しい時間の合間を縫って、「卒業の証」を祥子に届けに来てくださったのです。それは祥子のことを想った心やさしい証書で、「他の同級生たちと一緒に卒業させてあげたかった。」という先生たちの思いに溢れていました。私は閉ざされていた心が軽くなるのを感じたのです。それからまもなくでした、ある新聞社から「卒業の証」のことについて取材を申し込まれたのです。私はこの取材に応じるかどうか迷いました。そっとしておいてもらいたかったからです。実は校長先生が「卒業の証」を持ってきてくださったことは、本当に心から嬉しかっ

たのですが、それをまともに見ることが私には最初できませんでした。あまりにも辛かったからです。そんな状態でしたからこのことが新聞で報じられることが怖かったのです。しかし私のように苦しんでいる他の方たちへの励みになり、またそういう方たちを取り巻く周囲の人に何かしら気づいて貰えればと願ひ取材に応じる決心をしました。その年の命日は七回忌ということもあってか、たくさんの方がお参りにきてくださいました。そんな中で近所の方が「どうしようかと迷ったんだけど、お下がりです申し訳ないんですけど、もしよかったですら」と、とても言い出しにくそうに、その方の子供さんが着られた中学の制服を持ってこられたのです。その時載った新聞記事の中で私は、娘に中学の制服も揃えてやれない辛さを訴えました。その記事を読まれ、大変迷われたあげく持ってきてくださったのです。幼いときから遊んでもらったお姉さんの制服をいただいて祥子はとても喜んでいるように思えました。「うちの子のだからあまり大きくないけど、きっと祥子ちゃんにはぴったりだね。」との言葉が、とても心にしみました。また後日校長先生から、あの記事を読んだある校長先生を退職された方から、「今回のことは大切なことに気づかせていただいた。」とのお手紙が届いたことを教えていただきました。そしてこのことは私自身、自分の気持ちを素直に伝えることの大切さを、改めて考えさせられる出来事となったのです。



祥子がいなくなってしまうからの日々は、今思い起こすと様々な出来事との戦いの日々でした。祥子を亡くしたことを悲しむ間もなく、次々に襲いかかるように降りかかってくる問題を手探り状態の中なんとかしょうともがき、苦しみそれでも何とか少しでも前に進もうとしながらこれまで生きてきたような気がします。そしてそれはこれからもあまり変わらずに続いていくのかもしれませんが。交通事故の場合も他の殺人事件でも大切な家族を突然に奪われた遺族の悲しみには変わりはありません。しかし交通事故の場合は過失で片付けられ、またあまりにも頻繁に起きているために、その報道にそれほど多くの関心が向いていない風潮がどうしてもあります。交通事故に遭う事を運が悪いからで片付けられてはいないでしょうか。私も娘が交通事故によりその命を奪われることなど全く考えてもいませんでした。し

かし事故は起こったのです。今のこの車優先の社会においては、いつ大切な家族がその巻き添えになるかわからない状況なのです。そして犠牲ぎせいになってしまっただけでは遅すぎるのです。以前ある本の中で、被害者は「生存者」だという捉え方をしている方の話を読んだことがあります。ここでの生存者は、「様々な困難の中を生き抜いてきた者」という意味で使われていました。この表現が適切かどうかは、私にはなんともいえませんが、その意図することはよく理解できました。被害者になること、そして被害者遺族になるというのは、皆さんが想像するよりもはるかに厳しい状況に置かれることだと私は思います。「被害者も大変だが、加害者だじごくって地獄に落ちる。」という言葉を目にすることがありますが、この言葉は罪を犯した加害者がいかにこの社会において守られているか、そしてその陰かげでどれだけ多くの被害者が苦しみ、悲しみ辛い思いをしながらも必死になって生きているかをよく理解していない方が使われるものだと思います。被害者遺族は先に逝いってしまった家族がいかにかけがえのない存在であったか痛感させられ、そして守りたい命の尊さと重さそしてそのはかなさを想いながら、それでもその後を生き抜いていかなければならないのです。どうか皆さん被害者の声に耳を傾けてください。必死で訴えようとしている方たちがいます。そして今何が問題なのか、何がどう変わろうとしているのか、そして変えていかなければならないのかを共に考えてほしいのです。

多くの方々から支えられ今まで生きてくることができました。私ども家族の事を心配して下さった方々、そして祥子の為に涙して下さった方々に心より感謝申し上げます。

～最後まで読んで下さった方へ～

私の話を最後まで読んで下さいましたことを心から感謝いたします。

私のこの経験が皆さんの今後になにかしら活かせることがあれば嬉しいです。

ありがとうございました。

平成23年2月13日

渡邊 理香